

しがじん VOL.26 2022.9

# SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!



「特集 障害のある人の生活の豊かさとは」

会員更新・新入会のお願い 今年度方針



## こんにちは 全障研滋賀支部です !



“しがじん”はみんなのねがいをつなげるために、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部が発行しています。障害のある人に関わる人たちみんなのつながりをつくり、ひろげていきたいというねがいから生まれました。全障研では、障害者や家族の願いを大切に、すべての人の発達を保障するため研究活動に主体的に参加しています。

### 2022年度 事務局体制

支部長	白石 恵理子
研究部長	黒田 吉孝
全国委員	松島 明日香
事務局長	長友 志航
事務局次長	森原 都、上神 宗久
事務局	能勢 ゆかり、大師 観世、栗本 葉子、浦嶋 真由美、別所 尚子、谷 彩香、佐々木 健太、仁村 菜月子
協力員	黒田 恵美子、赤星 香早、望月 心み、望月 伸明、竹下 光

### 入会のご案内

全障研の活動は、会員の会費（年会費3000円）に支えられています。会員になっていただくと、全障研新聞などの出版物が届くほか、全障研主催の学習会に会員価格で参加していただくことができます。

ぜひ、一緒に学びあいませんか。

#### ★入会の申し込みは、

メールの件名に「全障研入会申込」とご記入の上、

①お名前 ②「しがじん」などの送付先 ③連絡先 ④所属など  
をお知らせください。

会費納入方法は後日相談とします。

詳しくは、下記までお問い合わせください。

sunaba.naga@gmail.com（事務局長 長友志航）





## 「特集 障害のある人の生活の豊かさとは」



4月24日（日）に「障害のある人の生活の豊かさとは」というテーマで学習会を行いました。ライフステージや職種、それぞれの立場を越えて、生活の豊かさについて考え、知り合うこと、障害のある人を幅広い視野で捉え、まるごと理解することにつながることを目指して学習会を設定しました。内容は、各ライフステージで働く方から「生活の豊かさとは」「その課題」について発言をいただき、白石恵理子先生から発言を踏まえてテーマに関わる講演をいただきました。

今回の学びをさらに深め、広げるために、学習会のまとめをお伝えしたいと思います。



### テーマ① 「生活の豊かさをどう捉えているか」

#### ◎就学前の現場から 元大津市発達支援センターやまびこ園長 河村さん

乳幼児期にある子どもたちにとっての「生活の豊かさ」を考えたとき、「自分で決められることがどれだけあるか」が大切だと思っています。とは言え、まだまだ一人でできることは少ない子どもたちですから、「おとなと相談しながら試したり、挑戦したりする場がどれだけあるか」が大切ですね。Aさんは、食べる、排泄する、寝る…といった生活の基本のところ大きな課題をもっていました。保育者とたくさん遊ぶなかで、この人とだったら…という関係ができてきて、椅子に座ろうか、ご飯も食べてみようかという姿を少しずつみせてくれるようになりました。また、重心の子どもたちの場合、園についてすぐにお部屋に連れていくのではなく、廊下の掲示物を一緒に見る、移動の途中でいろんな人に出会い、声をかけてもらう…そうして空間を共有していくことから保育がはじまります。おとなは子どもと一緒にどう生活していくかを考えるわけですが、そのなかにどれだけの感動があるかが問われます。そのためには、おとな自身が自分の生活を豊かにすることが必要だと考えています。

#### ◎学校現場から 県立養護学校教員

「生きる」「食べる」という生活の基盤が安定し、安心して生活を送れることがすべての前提です。その上で、放デイなどの第3の場の意義を感じます。学校とは異なる集団や取り組みの中で、好きなことや興味を広げ、学校では想像できない姿を見せる子もいます。放デイの友だちがしていた野球が好きになり、それをきっかけに、雨の日でも行きたかった散歩を葛藤した後「ノーゲーム」。好きな世界があるからこそ、折り合いをつける力の幅が広がったと思います。家庭には、家族と好きなことや楽しみを共有できる安心できる暮らしがあります。楽しみや好きなことに打ち込むことや「伝えたい人」「気持ちを寄せたい、通い合わせたい人」の存在が豊かさにつながると思います。

毎日通う学校だからこそ、楽しさや経験の広がりを大切にしたいです。授業の中で新しいことに出会う、学ぶ楽しさやおもしろさをたっぷり味わう。経験の広がりという点では、学校行事の大切さを感じます。いつもと違う舞台に立ち、自分への挑戦や新たな自分の一面に出会うことは、その人を豊かにしていくことだと思います。

### ◎放課後等デイサービスの現場から 放課後クラブともだち所長 盛井さん

放課後等デイサービスでは違う学校に通う子どもたち同士の出会いがあり、年齢層の広い異年齢集団の中で共に過ごすことで、子ども同士で憧れたり憧れられたりする関係やつながりができてきます。ときには、大人が予想できない繋がりが生まれる面白さもあります。子どもたちにとって放課後等デイサービスが安心できる、居心地のよい場になると、それぞれが持っている力を自然と発揮できたり、ストレスを発散することで家族との関係が良くなっていくこともあります。

子どもたち同士の交流だけでなく、地域の方との交流も大切に取り組んでいます。地域の中に子どもたちの事を知っている人が増えることが、暮らしの安心や生きやすさにつながると考えています。関係機関との支援検討や共有を丁寧に重ねることも子どもたちの生活の豊かさに繋がっていきます。今後は、地元のことを知る機会や、芸術文化に触れながら答えのない表現の世界を味わうことにも取り組んでいきたいと考えています。

### ◎成人期の現場から 社会就労センターこだま 浅田さん

そもそも生活って何をさすのでしょうか。私は部分的ではなく、その人を取り巻く24時間のことではないかと考えています。私の出会った福祉会の印象に残る利用者の中にミツオさんという方がいました。そこは日中支援事業所とグループホームが隣接していて、まさに彼の生活を丸ごと捉えることのできる場所です。

その人にとって単に「〇〇ができるようになった」という支援でなくても「今日、この瞬間好きなことを目一杯楽しむ」「ゆったりしたいんやな」と枠組みを狭く捉えず、本人の願いから生活を組み立て紡ぎました。どんな人にもその人なりの生活に対する希望や思いがあります。「こんな能力があるのだから」「このくらいはしてもらわないと」と外側からその人の生活や人生を規定する、鋳型にはめ込むのはちがうと思っています。



## テーマ② 「生活の豊かさの実現に向けて、大切にしていること・課題と感じていること」

### ◎就学前の現場から 元大津市発達支援センターやまびこ園長 河村さん

お母さん方は我が子に対し「こういう子だ」と思っているのですが、療育を通して「こんな姿もあるんだ」と気づいていくこと、子育てのなかでの感動を職員と共感しあうこと、そして、同じように悩む母親同士の存在があることで、生活の質が変わっていくように思います。療育に来ると、家族だけではなく、友だちがいる生活になります。好きな先生、他のお母さん、いろんな職員…様々な出会いを経験します。そうした社会との出会いは、予期せぬ広がりにつながります。

また、食事が広がりにくい子が多いこともあって、やまびこではサンマ焼きといった季節の取り組みも大事にしています。焼けるときの匂い、シューっという音、「おいしくなーれ」のかけ声…を実体験するなかで、初めて魚を食べられた子も、食べられなかった子もいるのですが、食べる・食べないではない、この先で生きるだろうなという経験になると考えます。

課題は、次のライフステージにどうつないでいくかですね。「幼稚園でどーにかコミュニケーションをとりながらやっているよ」といった話を聞くのですが、そうした姿のもとになる“種”をたくさん持って次にいけたらいいなと思いますね。

## ◎学校現場から 県立養護学校教員

物理的、心理的に取り巻く環境がしんどくなる中で、寛容さがなくなっていると感じます。「トラブルを防ぐ」「隙間時間をなくす」ことが叫ばれ、子どもの自由が奪われています。誰のためなのか、常に問い続ける必要があります。トラブルを乗り越える力、自由時間を過ごせる力も大切ではないでしょうか？「逆算の教育」という言葉にも違和感を感じます。それぞれの時期の大切さがあり、その子の育ちや「今」があるはずです。「今」を充実させて、楽しんできている人だからこそ、自分の未来に期待できるのではないのでしょうか？自分たちもどう生きることが幸せ（豊か）なのか考える必要があると思います。

大人への安心感を育み、自分への自信をもち、願いや希望に満ちた未来を期待できるように、「今」を豊かに輝かせることを大切にしたいです。

## ◎放課後等デイサービスの現場から 放課後クラブともだち所長 盛井さん

職場では大人が子どもたちの豊かさに気づく視点を持てているのかという課題から、職員集団で子どもたちと関わるようにしています。また保護者とも子どもたちのことが共有できるように、お迎えに来られた時の2~3分の立ち話を大切にしています。何気ない会話に支援のヒントがあったり、保護者からの「ちょっと聞いてー」に繋がることもあります。保護者とは子ども達の将来も含めて一緒に考えていけることや、必要に応じて行政等に要望書を提出するなどのアクションを起こすことも大切にしています。

「助けて〜」と言えば必ず誰かが助けてくれる地域であること。「できること」ばかりが評価されがちな世の中ですが、SOSを出しながら、誰かに相談をしながら生活していく方法もあることを子ども達には知っていてほしいと思います。地域の人達との交流を重ねる中で、顔と顔が見える安心できる関係性を子どもたちが感じてくれていたらいいなと思います。

## ◎成人期の現場から 社会就労センターこだま 浅田さん

学齢期から成人期へと変わるとき、長いスパンで捉える必要があります。支援する側も関わりをその時期ごとに変えていかなくてはならないし、本人の思いも変化すると捉えなくてはなりません。

どんなに重度の人であっても「わからないだろう、してあげよう」だけでは主体的な生活は築けない。その人が「一人でできる」を目指すより、「できない、助けてほしいこと」を伝える、コミュニケーションの力が試されるます。つまり応援団、味方を増やすという視点です。

「この頃やりにくくなった」は、もしかしたらその人が成長変化していることに気づけていない、支援者に課題があることが多いです。

できなくても自分らしく暮らしを紡いでいきたい、そんな願いに寄り添い、こちら側の都合で引っ張るのでなく、本人の気持ちに寄り添って工夫したり、協力する関係性を築くことが大切です。人間関係、家族関係の変化、その都度伝えながら取り組むことが私達に求められているのではないかと思います。

# 障害のある人の生活のゆたかさを考える

滋賀大学教授 白石恵理子

今、「生活のゆたかさ」について語り合う意義とは何でしょうか？ 全障研では発達保障の理念と実践を追求してきたわけですが、発達保障とは単に「できることを増やす」ということではなく、なかまや社会とつながりあって自分らしく生きることであり、そして、だれもが自分や社会への「ねがい」をもっているということが出発点だとおさえてきました。しかし今、幸福に生きる権利、健康で文化的な生活への権利の社会的基盤がゆらぎ、その大前提である平和もが脅かされています。

福祉のサービス化が進んだことで生活がコマ切れになったり、家庭と学校が手をつなぎあうことに制限がかかったり、ライフステージをこえて真に連携する余裕がないなかで、それぞれのステージで子どもも教師・職員も結果的に追い込まれてしまったりといった状況が起きています。こんな時期だからこそ、ライフステージや立場をこえて、生活のゆたかさとは何かを語り合うことが求められているのではないのでしょうか。

障害児の保育や教育の歴史において、「生活」はどのように位置づけられてきたのでしょうか。乳幼児の保育・療育においては、生活のなかに発達の源泉があるとおさえ、生活時間、生活空間、生活集団をどう教育的に組織していくか、乳幼児の生活文化の重要性を考えてきました。また、形式主義・知識注入主義的教育への対抗としての生活教育の主張を受けて、障害児教育においても、子どもを「生活の主体」とする実践が追求されてきました。同時にそれは、社会適応のみをめざす「生活」観とのたたかいてもあったと考えます。また、放課後や成人期の実践からは、誰にとっても「3つの場」が必要であること、24時間をまるごととらえること、そして何よりも、生活の主体はその人自身であること、それはどんなに障害が重くても変わらないことが確かめられてきました。

今回、4人のパネラーから、生活にかかわって重要なメッセージがありました。その一つひとつの提起をうけ、語り合っていきたいものです。子どもたち、なかまたち、家族の生活現実に目を向け、そこにある「ねがい」を読みとき、なかまや社会とつながりあって自分らしく生きるとはどういうことか、そのための条件とは何かを考えていきましょう。



## 学習会の感想をいただきました！

ライフステージごとの立場で、生活の豊かさを話し合いましたが、根本的なところのポイントに違いはないなと思いました。スポットをどこに当てるかによって、取り組み方は変わるかもしれませんが、同じ価値観の中で実践が進んでいくことに安心感と繋がりを感じました。この繋がりがステージごとに切り分けられてしまうことなく、繋がり続けて、障害のある人たちの豊かな生活が形成されていくことを願います。白石先生の講義では、「生活」ということの捉え方や、その意味を考える機会になりました。かけがえのないその人らしさを尊重すること、人間としての普遍的な豊かさを追求し続けること。一面的に生活について捉えるのではなく、あわせてつくりあげていくことが大切だと改めて思いました。つい、こういう生活をと、願いをもとに支援を考えているはずが、どこか枠にはめた、はめられたものになってないか、はたして本当にその人の主体性や望んでいるものが反映されているか、家族や支援者関わり合う人たちが一緒に考え相談しながら、生活やくらしを作っていく。改めて問い直しながら実践に取り組んでいきたいと思えます。

各分野からの事例を交えて話してくださり、それぞれで大事にされていることを聞かせてもらい、学びになりました。 幼児期から成人期まで見通しもつことができ、大切にしたいことがずっと引き継がれていることもわかりました。 私は幼児期の子どもたちやその保護者と日々関わっていますが、内面の気持ちをどう読み取り生かしていくかが大事であるので、引きつづき、対応していきたいと感じました。 白石先生の講演会のなかで、親子にとっての安心できる場所や人をつくり、そのためにはつないでいく職員の役割、空間、時間の軸を大切にするとっておられたので、少しでも日々取り組み積み上げていきたいと思いました。 貴重な研修をありがとうございました。

乳児期から成人期まで、生きること、生活すること、その人らしくあること、家族も丸ごと受けとめ支えること等等。お腹いっぱいになりました。親子療育の意義を再認識して、明日からの療育に向かいます。また、社会生活への第一歩の場となるようチームワークも育みます。参加してよかったです。ありがとうございました。 会員登録して、また学習会に参加したいです。



## まとめ

乳幼児期は、安心できる大人との関係を築き、いろいろな人や感動できるものに出会う中で、「自分で決めて」実感を伴った生活を送ることの大切さが話されました。合わせて、子育ての感動を保護者との共有していくことの意義についても触れられました。

学齢期は、逆算の教育ではなく、今を輝かせることの大切さが話されました。学校生活の中で、新しいことに会う、学ぶ楽しさに気づく、そして、新たな自分に出会うことが、その人自身の豊かさにつながるということが話されました。

放デイからは、異年齢集団の中で、憧れ—憧れられる関係が生まれ、地域とつながることで暮らしの安心に繋がられていることが話されました。関係機関との連携や文化に触れるということにも力を入れておられました。

成人期からは、目の前の課題に終始するのではなく、本人の歩んできた歴史や願い、家族の状況に目を向けながら、その人らしさが尊重される生活を臨機に作っていく息の長い営みの大切さが話されました。

どのパネラーからも話されたのは、今を輝かせ、その人らしさを尊重するということだったと思います。そのために安心できる支援者の存在、仲間存在、文化との出会い、保護者や家族とのつながりを大切することが話されました。

本人の思いやねがいを読み解き、必要な教育や支援を行っていくことが支援者に求められます。加えて、本人の生活や歴史、保護者や家族の思いにも思いを馳せられる力も支援者に必要な力だと思っています。また、窮屈で生きにくい社会の中で、障害のある人に関わる支援者自身が豊かであるかについても考える必要があると思いました。

今回の学習会では、ライフステージに応じた「生活の豊かさ」を知り合うことで、生涯を通して大切にしたいことやどのライフステージにも共通することを学ぶことができました。また、それぞれの職場のもつ意義や専門性について学ぶことができたことは大きかったと思います。今後も、全障研滋賀支部では、ライフステージや職場を越えて学ぶことのできる学習会を行い、明日からの元氣と実践につなげていきたいと思っています。

(ささき けんた)



PONTAの  
14 ゆるゆる日記



たぬきや=PONTAの作業所



その願いがかなう日は来るのか……?!

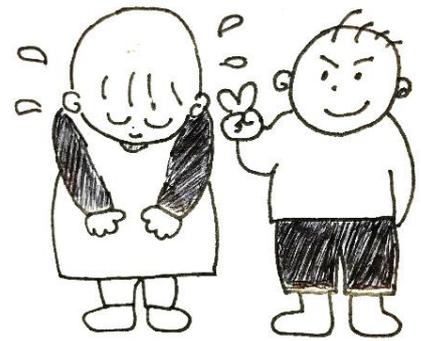
PONTAの  
15 ゆるゆる日記



去年の字直す年に一回やってくるこのTonくん



あっさり背をぬかされてしばらく立ち直れないPONTA



母                      ぽんた (20)

Pontaは、20歳のダウン症の男子です。三人きょうだいの末っ子。

嵐が大好きだったのですが、最近は何にわ男子にも夢中です。作業所で働いたお金を貯めて、CDを買うのが楽しみです(^o^)



..あとかき..

編集担当のにむらです。ながーい2学期に負けないように、最近筋トレ始めました(^o^)笑  
今年度のしがじんの表紙は唐崎やよい作業所の皆さまから提供していただいています。素敵な作品をありがとうございます！皆様からの感想お待ちしております~！次回もお楽しみに！！



◎今回の表紙 「花火」 (佐藤 良平さん)

日頃みんなが気づかないことも気づいてくれる作者の作品作りは、マイペースだけどゆっくり時間をかけて細部までこだわって仕上げていきます。時に色合いは誰にも負けない感性で表現されていきます。

今回の作品は、家族で見に行った、真夏の夜空に華麗に咲く花火を表現しました。

